The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	はじめに
Author(s)	高安，啓介
Citation	a+a 美学研究. 2025, 16, p. 8-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はじめに

哲学の一分野である美学は、今日ますます考察の対象を広げつつあります。芸術作品といった特別な対象だけではなく、日常生活のありかたにも目が向けられるようになりました。人々の暮らしの営みそれ自体に、美しさやそれに類する価値を見出そうという議論もありえます。しかし、生きることの美学というと、何となく俗っぽさがともないます。学問としての美学は、人間の生をめぐって、何を取り立てて論じようとするのでしょうか。

美とは、ものそれ自体の魅力のことだとするならば、自分の生も、他人の生も、目的にたいする手段ではなく、それ自体かけがえのない価値を持ちうるという認識こそが、生の充実をもたらすのであり、生きることの美学はその可能性について議論するものだと考えます。わたしたちは、自分の生に満足いかないとき、他人の生にもつらく当たりがちです。美学は、人生相談に応じるものでなくても、現代人の生きづらさも考慮したいものです。

本号は、生きることの美学という題名のもと、相応しい論考を書いてくださりそうな方々にお頼みして、九本の論考を得ることができました。立場などは関係なく、論考をひとしく並べてみました。一般に、生きることの美学というと、自分らしい生きかたが話題になりそうですが、本号の多くの論考は、ナルシスト美学から解放してくれる視点をあたえてくれます。すなわち、他者との交わりのなかで生の意味が見出され、自分の生きかたも変わりうるという視点です。

美学は、芸術の外にその活路を見出しつつあるとしても、普通の生活について考えるにおよんで、芸術はふたたび舞い戻ってきます。本号の論考すべてが芸術の可能性について論じていますが、それはすなわち、日常経験について考えるうえで芸術がもとめられていることを意味します。芸術は、普通の生活のありかたを見直す機会をあたえるだけでなく、日常生活における普通をむしろ強めることで、同じ経験をともにしている人々の連帯をうながしたりもします。

二〇二四年一〇月、大阪大学中之島センターを主会場として、美学会全国大会が開催されました。この大会に向けて、大阪大学美学研究室では一年前から「生きることの美学」をテーマに定めて、特別企画の準備を進めてきました。当日は多くの参加者を迎え、活発な議論が交わされました。この大会についての報告もご覧いただけます。本号をとおして、美学の議論がさらに深まるとともに、研究の輪がいっそう広がることを願っています。

高安啓介